

近江中山の芋くらべ祭と女性

蓼 沼 康 子

1. 問題
2. 芋くらべ祭の概要
3. 祭祀組織
4. 芋くらべ祭の変化
5. 結語

1. 問 題

本稿では、滋賀県蒲生郡日野町中山において行われている芋くらべ祭と女性のかかわりを祭の
変化という視点から分析することを目的としている。^(註1) 芋くらべ祭とは、滋賀県湖東地方の中山
という地域で古くから行われている祭で、毎年米の収穫の前に里芋の芋茎の長さを競い、その結
果で米の豊作不作を占う祭である。

中山は東谷と西谷とに村が分けられており、双分制の視点からも注目されてきた村であ
る。^(註2) 芋くらべ祭も、東谷と西谷とがそれぞれに長い芋茎を持ち寄り競い合う。そして、西谷の
芋が長く西谷が勝てば、その年の米は豊作であるとされる。反対に東谷が勝利した年は米は不作
である。この点には地形的な理由付けがなされている。祭においても東西の対立は明確で、祭の
際の衣装もたとえば足袋は東谷の者は白足袋、西谷は黒足袋を身に付けるなどとあらゆる点にお
いて対立が見られる。そして、東谷は女性神を、西谷は男性神をあがなうものとされ、その所作
も東谷はおとなしく、西谷は荒々しいものとなっている。

さらには、芋という畑作物で米の豊凶を占うという点から、新たな分析も可能ではないかと考
えられる。^(註3)

芋くらべ祭のために、祭の10日ほど前からさまざまな準備が開始される。山若（ヤマワカ）
と呼ばれる祭を行う若者たちは、伝承されてきた祭の際の儀礼や作法の動作を一つ一つ身に付け
るために「ナラシ」と呼ばれる練習を祭の10日前から始める。東西それぞれの場所で、村の古

老たちから細かく、その所作を厳しく伝えられるのである。練習は毎夜遅くまで続けられる。さらに、山若たちはそれぞれの地区で芋茎の長い芋を探さなければならない。相手方に知られないように、長い芋を探して、祭当日の早朝芋を掘りに行くのである。芋くらべのための芋を自分の家から出すことは名誉ともされている。中山は宮座といわれる年齢階梯制をもつ村落であり、芋くらべ祭も宮座の最年長者を総責任者として行われるものである。そして、実際に祭を行う主役は山若（ヤマワカ）と呼ばれる15歳以上の男子であり、さらにその下位には山子（ヤマコ）と呼ばれる8歳以上14歳以下の男子の組織が存在し、祭の準備などに携わる。宮座組織はそれぞれの年齢の段階により役割が決められており、新規の加入者の存在により段階が次に進むことになる。メンバーがそれぞれの役割を祭の中で果たすことにより、祭が成立しているのである。

この芋くらべ祭の起源は非常に古く、たどれる史料だけでも820年という歴史をもつ。しかし、その間、祭はいくつかの点において変化を見せている。野神祭といわれる芋くらべ祭も、蒲生貞秀の記録（1169）によると「山神乃祭」とされており、当時は山の神の祭であったようである。その後の経緯は明らかではないが、祭の行われる山が野神山といわれるように、野神の祭とされていく。野神山付近に「山の神」が祀られてもいる。現在では熊野神社の祭礼として行われており、祭を始める前にまず神饌を神社に持参しこれからくらべる芋も神社に運び、神主のおほらいを受け、三三九度の盃の儀礼が行われる。また、東西に別れて芋の芋茎の長さを競い、米の豊凶を占うこの祭は、その主役が若者であることも手伝って、芋くらべの決着がなかなかつかず日が暮れても祭が続くことや、争いが起こることもあったという。そのたびに、自粛が促され少しずつ祭も形を変えてきた。そして、祭の日時もかつては8月1日に行われていたようで、今でも芋くらべ祭が「八朔祭」ともいわれている。しかし、明治44年改暦の際に新暦の9月10日とされた。そして、昭和46年には学校の夏休みとの関係から現在の9月1日に変更された。

さらに、近年中山の生業形態は大きく変化しており、第2種兼業農家が9割近くを占めるようになってきている。それに伴い米の豊凶を占う芋くらべ祭の意味も変化しているが、昭和32年に「芋くらべ祭保存会」が組織され、祭の存続がなされているが、社会変化の中での祭の維持が問題となっている。伝統的な祭を維持していくことは重要なことであり、芋くらべ祭も県指定、国指定の重要無形民俗文化財となっている。しかし、米の豊作・不作が人々の生活を大きく左右し、主要な関心事であった時代とは異なり、村をあげての祭であったものが、今日では祭の役に当たらない者は普段どおり仕事に出かけるなど祭の在り方に大きな変化が現れている。その中で、祭の主役をつとめる山若といわれる若者たちの母親の果たす役割や意味は相変わらず重要なものとなっている。またその他にも女性たちは、宮座といわれるオトナの妻として芋くらべ祭にかかわりをもつ。その際に、女性たちがどのように祭を考えるかは、今日祭を行っていく上に影響をもつようになっているという。

伝統的に日本の祭は、多くの場合女性を排除してきた。祭の実行は、専ら男性の手で行われ、

女性はその表舞台には出てはいけないものとされてきた。それは、女性の社会での位置の問題、女性とケガレとの問題など多くの視点からの分析が可能であると思われるが、ここでは芋くらべ祭の中でこれまで女性たちはどのような役割を持ってきたのかを見ることにより、女性と祭のかかわりを考えてみたい。芋くらべ祭が行われるときには、女性たちは母として妻として、あるいは祖母として重要な役割を果たしてきた。そして、近年ではとくにそこでは女性同士のネットワークによる機能が果たされている。しかし、いずれにしろ女性は祭には参加はしない。観客として、見物するのである。

また、現在さまざまな点で変化を見せる村の中で、そのひとつである祭もかつてのように伝統的な形そのままでの維持は困難になっているようである。年齢階梯の宮座を通して受け継がれるべき祭の所作や規則であるが、その練習風景や祭の準備にも変化が生じている。その中で、母としてあるいは妻として祭を支えてきた女性たちの祭への態度は、他の社会的背景の変化とともにますます重要な意味をもってきている。そこで、社会変化の中で芋くらべ祭を存続させていく上での女性のもつ意味についてもここでは考えてみたい。

2. 芋くらべ祭の概要

①地理的概況

芋くらべ祭の行われる滋賀県蒲生郡日野町中山は、琵琶湖の南東部に位置し、米原駅から近江鉄道で1時間ほどのところにある。この地域は琵琶湖湖東地区とも呼ばれている。遠くに鈴鹿山地を望む中山は平均標高161メートルの丘陵地であり、総面積は5.442平方キロメートルでその60パーセントを山林が占めている。集落の南北に緩い勾配の谷が数本走っており、その谷ぞいに棚田が重なりあっている。気温は温暖で、年間平均気温は15度前後、年間降雨量は1,300ミリメートルである。

中山の集落は東谷、西谷、徳谷の三字からなり、中山三ヶ谷と称している。東谷、西谷とそこから東へ1キロメートルほど離れて日野川沿いに、江戸中期に東西両村から移住したと言われていた徳谷が存在する。中山の総戸数は133戸、東谷70戸、西谷40戸、徳谷23戸、人口は東谷340人、西谷179人、徳谷99人（1995年4月）である。中山の総戸数、総人口ともに明治以来大きな変化を見せてはいない。

農業は、米の単作農業であり、野菜を自家用程度に栽培している。1995年における農家数は84戸で全戸の63.3パーセントにあたる。農業就業人口は245人であり、総人口の39.6パーセントとなる。さらに、専業農家は3戸、3.6パーセント、第一種兼業農家も6戸、7.1パーセントと低く、第二種兼業農家が75戸、89.3パーセントとなっている。かつては、重なり合う棚田を耕作しその労働量も大変なものであったが、現在では土地改良事業により棚田が整備され大幅

に緩和された。

中山から峠をひとつ越えたところに工業団地が存在し、現在では中山の多くの人が通勤している。中山の農業は大きく変化を見せ、人々の暮らしも大きく変化している。

②歴史

芋くらべ祭の起源については、明確な史料が存在せず、何時始められたかは定かではないが、嘉応元年（1169）蒲生貞秀による記録として残されたものが中山にある金剛定寺の縁起の書中に見られる。^(註4) その縁起の中に記されている芋くらべ祭は、現在行われている祭祀儀礼と大きな差は見られない。

また、芋くらべ祭の起源についてはいくつかの伝説が存在する。そのひとつは『ダザボシ伝説』と言われるもので、琵琶湖の土で富士山を作ったといわれるダザボシという大男が、土を運んでいたところ丁度中山のところでその天秤棒が折れてしまった。その時に、ダザボシは中山の人々に天秤棒のかわりになる里芋のズイキを探せと言ったが、村人は見つけれず、「今度くるまでに必ず探しておけ」という言葉を残してダザボシは東の方に消えてしまった。それから人々は村中を大きな里芋を探し歩き、さらには自分たちで芋を栽培して大きさを競い、ダザボシの来るのを待ち、毎年一番の芋を競ったという。

この芋くらべ祭は、元来は山の神の祭であり、それが野神の祭に変化したとされている。祭場も現在行われている野神山と尾根続きの場所で行われていた。それが山の神と野神が同一視され、野神祭となったと考えられる。さらに現在は、村の熊野神社の祭とされ、祭当日もまず神社での祭礼を行うことになっている。

③芋くらべ祭の儀礼

芋くらべ祭は現在9月1日に行われている。祭の当日は、早朝に山若たちによる芋の掘り出しから始まる。それまでに、東西それぞれに探しておいた芋を朝6時頃に、山若たちが集合して掘り出す。祭の芋を自家の畑から出すことは名誉であるとされていた。芋の長さ、どこの家のものかは記録されて残される。^(註5) その芋を集会場に運び、そこで飾り付けが山若とオトナによって行われる。前日に熊野神社の竹林から運びだし、山子たちによって磨かれた竹に芋をくくりつける。この飾り付けも東西異なり、微妙で複雑な細工がなされるが、それはオトナたちの指導のもとに行われる。飾り付けられた芋は、その長さがわからないように芋の葉で覆われてしまう。

その後、山若たちはいったん各家に戻り、袴に着替える。その間、東西の山若のうち芋くらべに関しての事柄を取り仕切る担当の者どうしにより、これからくらべる芋の長さについて、芋をくらべる回数について戦略を練りながらの情報交換が行われる。今日の祭はさまざまな点において変化し、芋をくらべることも儀礼的であるかに思われるが、この時の山若たちはかなり真剣に

自分たちの芋が長いことを主張する。

一方、熊野神社ではオトナたちによって朝から祭の準備が行われている。宮座の最長老である神主は、この日のために餅をつき、その他の供物も神社の社務所に届けられる。その供物の準備には、オトナの妻たちや山若の母親たちがかかわる。そして、一度神社に供えられた供物は、祭場である野神山にオトナたちによって運ばれる。

午後1時になると、太鼓を合図に東西おのおのの集会所に正装して集まった7人の山若、山子たちによって、飾り付けられた芋が熊野神社に運ばれる。神社の社務所では、神主と副神主、そして山若たちにより三三九度の盃が順番に行われる。そして、芋の行列が東西それぞれの道をたどって野神山へと向かう。その時に山若たちは順番に並び、その後を山子たちが芋を飾り付けた竹を担いで続く。

祭場である野神山は、菱垣によって囲われており、その中心はヒノキとヒロモギの神木である。その周囲には小石が積み上げられている。そこはおよそ300平方メートルといわれており、そこは祭の前に山子たちによって洗われた石が敷き詰められている。その菱垣の中には祭にかかわる者以外は入ることはできず、芋くらべの儀礼の際にも中に入る者は履物を脱ぐ。女性は祭場の中に立ち入ることはできない。

菱垣で囲まれた円状の祭場では、山若、山子が所定の位置につき、くらべられる芋が置かれて祭が始まる。神座の天の棚からは金石、吊り石とよばれる直径約20センチメートルほどの石が吊り下げられている。

ここでは、まず「水廻し」により山若たちが清められ、野神に参拝し、これからくらべる芋をあらためて神前に供える。そして、さらに神を拝し、準備した供物を神に供える。その後再度神を拝し、神に酒を献じる。また、神を拝し、その後に祭の参加者である山若、山子に神に供えた膳と同じものが出され、神と人とが共食の直会をすることになる。そして、カワセノハンギリが行われるが、それはハンギリと呼ばれる桶に入れられた贈り物の交換のことであり、東西の山若どうしの共食を意味する。この後、神の膳が下げられ、山若、山子の膳が下げられる。そして、山若たちの酒宴の儀礼である「われわれの三三九度」が行われる。それらがすんだ時点で、いよいよ芋くらべとなるのである。まず、芋をくらべる役である山若に酒が振る舞われ、双方が十分に酒を酌み交わした後に芋が中央に運び出される。このときすでに祭が始まって2時間ほどが経過している。

先程、酒を酌み交わした山若どうしが用意してあった竹の丈尺で「芋打ち」と呼ばれる芋くらべが始まる。1回目には東西それぞれ自分の芋をはかり、2回目には入れ替わって相手方の芋をはかる。そして、3回目、4回目と交互に自分方、相手方の芋をはかる。その芋をくらべることは、どちらかが勝ち名乗りを上げ、それを他方が認めて決着がつくまで何回でも続けられる。まだ夏の季節に行われるわけで、芋をくらべている山若の全身からは汗が滴っている。そして、決

着がつくと、東西芋を交換し、さらに神を拝して山を降りることになる。東西それぞれの山子たちが、相手方の芋をかついで山を降りそれぞれの神主のところに芋を届ける。一方、山若たちは熊野神社での直会に出席し、宮座の大人から山若たちに茶が配られ、東西の山若一番尉に礼金と酒一升が渡され直会は終了する。午後1時に熊野神社で開始された祭であるが、この時にはおおよそ午後5時頃になっている。

3. 祭祀組織

芋くらべ祭は、歴史的に中山で重要な位置を占めてきた。それは、この祭が中山という村落社会の構造を象徴するものであり、人々が暮らしていく上でさまざまな機能を果たしてきたためである。この祭を行う組織は宮座と呼ばれる年齢階梯制にのっとったもので、中山をはじめとする近江一帯に広く見られる年齢を基準として村落を組織するという原則をそこに見る事ができる。ここでは、芋くらべ祭に重要な役割を果たす組織について述べる。

①山子（ヤマコ）

東谷西谷ともに8歳から14歳の男児全員により構成される。とくに山子になるための条件や人数の制限はない。したがって、東西の人数に不均衡が生じる場合も多い。山子は生年月日の順番に早い方から、一番尉（いちばんじょう）、二番尉、三番尉と番号で呼ばれる。一番尉が祭に関することに指揮をとり、権威ある役である。

祭の準備としては、野神山の祭場を清掃し、敷きつめられる石を洗って並べ、祭場の周囲を囲む竹の用意をする。野神山の祭場へ向かう山の麓からの道に栗の葉を敷き、ムカデ道を作るのも山子の役割である。そして、くらべる芋をくくり付ける竹を糠を使って磨き上げるのも山子の仕事である。それらの仕事の采配を一番尉がふるい、生年による順番にしたがった規律も厳しい。

祭の当日は木綿緋の着物にへこ帯をする。そして、くらべる芋をくくり付けた竹の運搬は山子の役目である。祭の間は祭場の中で山若の下に順番に並び、ともに膳を配られる。祭の中で「神の角力をとること」が行われるが、山子はその取り組みの儀礼を行う。

②山若（ヤマワカ）

祭の儀礼を司る主役である。祭の当日は、袴を着て儀礼を行う山若は人々の注目を集め、かつては村の祭祀をすべて行っていた。15歳以上の長男つまり跡取りの男児をもって構成される。山若は東西7名ずつ、合計14名によって成る。各家の長男は15歳になると、山若入りをする事になり、それは村の成員として通らなければならないものであった。また、婿養子によりその家の跡取りとなる者の場合は、婿となった年に最下位の七番尉として年齢にかかわらず山若入

りをする。その年に山若入りする者と交替に一番尉が山若から抜ける。つまり、その年の新規の加入者の数によりメンバーが更新されるのであるから、山若の任期は一定しない。近年では、子どもの数も減少しているため、何年も最下位の七番尉を続けるということも多いという。また、やむを得ぬ事情で山若入りをしない場合には、義務金という名の負担金を納める「座」という免除制度がある。

山若も山子同様に、年齢順に一番尉、二番尉、三番尉と呼ばれる。山若はそれぞれに役割が異なり、厳しい序列が存在する。以下、それぞれの役割を簡単に述べる。

- 一番尉 神の代役と考えられ、神に直接接することができるのは一番尉のみである。祭場では最上座に座り、他の山若と対座する位置にあつて、祭の間じゅう一切無言である。
- 二番尉 祭の采配をふるうもので、儀礼の進行を司る。山若の中で最も権限のある役である。芋をくらべた後の判定は、この二番尉が行う。つまり、祭の儀礼がうまく進むかどうか、芋くらべの競技が円滑に進められるかどうかは二番尉の手腕にかかっているとされている。
- 三番尉 芋に関するすべての責任をおう。祭の際にくらべる芋の選定も三番尉が中心になつて行う。くらべる芋を竹にくくる飾り付けでも、最後に水引きを結ぶ役である。祭では、実際に定尺で芋を打つ（はかる）役目を果たす。つまり、三番尉は祭の花形と考えられている。
- 四番尉 祭全般の補佐役、とくに三番尉の補佐をつとめる。
神座の釣り石を切り落とす役でもある。一番尉二番尉の盃の給仕、芋打ちの盃の給仕も行う。カワセノハンギリと呼ばれる「出し」の作成、献上も四番尉の役割である。
- 五番尉 祭全般の補佐役。六番尉、七番尉の指導の役を果たす。芋打ちの補佐もする。
- 六番尉 五番尉とともに、祭全般の補佐をする。
- 七番尉 野神山での最初の儀礼「水廻し」を行う。
山若の最下位であり、祭の補佐を行うとともに見習いとして参加する。

③勝手（カッテ）

山若を終了した者の中から選ばれ、東西各1名が祭の進行の補佐を行う。野神山での儀礼の際には、紋付き羽織袴を身に付け、祭場の奥で祭で必要とされる品々を準備しその都度山若に渡し、祭が滞りなく進行するように山若の着衣の乱れを直すなど裏方を行う。

祭の準備の段階では、古老たちとともに山若に指導を行う。

④大人（オトナ）

中山の宮座は、オトナとも呼ばれ東西6人ずつの12人により構成されている。東西の最年長者が神主であり、東西が交互に正副の神主を務める。神主は村の一年間の祭祀に関する一切を取り仕切る。芋くらべ祭では、直接儀礼に参加することはないが、儀礼の全般を取り仕切るものであり、指導にあたっている。ただし、神主は神饌の準備として直径約20センチメートルの丸餅70個をついて芋を献上した家や、奉仕をした者に配る。また、その他のオトナたちもそれぞれに神に供えるものを用意する。

オトナになるためには、山子と山若を経験することが必要とされている。山若を経験したときに作られる宮座順番位に応じて、加入が許される。宮座入りの際には、12人振舞いと称する加入儀礼を行う。毎年1月6日に熊野神社にオトナが集まった後、新たな加入者がオトナ11人を家に招待をしてお馳走をする。そして、神主を終えるとオトナ仲間に挨拶をして、翌年の正月2日の山の神祭の後に社務所に招待され、オトナヌケの祝いが行われる。そして、大老人（オオオトナ）と呼ばれるようになる。

⑤女性の役割

芋くらべ祭において祭に直接女性が参加することは許されていない。祭場である野神山に入山することも嫌われた。神饌の餅をつくときも、女性は一切手を貸さない。ただし、御鯉（オリ）と呼ばれる供えものは、女性が作るものとされている。御鯉（オリ）とは、米粉を水でとき、これを蒸して鯉の形をした木型に入れて薄くのぼしたものである。御鯉はオトナが一人25枚、山若も一人25枚ずつ献上することになっている。したがって、それぞれの家の主婦が準備する。この御鯉をつくる木型は代々家に伝わるものとされ、家ごとに少しずつ形が異なっている。

また、山子の家では山子たちが祭の準備をしている間、昼食やおやつを交替で用意して届ける。その年の初生りの南瓜を使って、南瓜にまぜて小豆粥を母親たちは作って作業をしている山子に届け食べさせた。

また、その年に婚礼があった家では、娘の婚出先の親族や嫁の生家の親族を招待して「初ヨビ」と呼ばれる饗宴をする。これは芋くらべ祭が珍しい儀礼であるからということと、婚礼の際に十分でなかった双方の親族の披露と交流が行われる。カマドミセと呼ばれる儀式も行われるが、それはカマドを見せるということでカッテ（台所）に自由に入出入りが許されるということである。つまり、その後双方の親戚はより親密な交際ができるようになるのである。この「初ヨビ」の準備や接待も女性の仕事とされている。

4. 芋くらべ祭の変化

中山で伝統的に非常に長い歴史をもって維持されてきた芋くらべ祭であるが、近年さまざまな変化が生じている。勿論、芋くらべ祭は長年にわたって多少の変化をさせてきた。伝統を維持するとは古い形のままで維持するということばかりではない。人々の生活の中に存続するものは、彼らの生活と別なところに存在していたのでは意味を失ってしまう。芋くらべ祭も中山の人々の中で生きた祭であったから、それぞれの時代にあった形で変化をしてきた。しかし、近年中山をはじめとする日本の農村を取り巻く状況は大きく変化している。中山も現在では、第二種兼業農家がほとんどをしめている。そこで米の豊作不作を占う芋くらべ祭が存続していく意味とはいったい何なのだろうか。

芋くらべ祭をめぐる状況の変化の第一は、生業形態の変化つまり農業中心からよそへ働きに行くこと中心の家計への変化であろう。中山は、ある意味では非常によい条件に恵まれている。近隣に工業団地やゴルフ場を有し、そこに働きに行きながら農業も維持できる状況にある。したがって、今日でも中山の総戸数にそれほどの増減はない。しかし、米のもつ意味には大きな変化が生じている。以上のような状況から芋くらべ祭の当日も普段どおり仕事に出かける人も多く、かつてのように芋くらべ祭が村をあげての行事という様相に変化を生んでいる。

また、芋くらべ祭の芋を自分の家から出すことはかつてはとても名誉なことで競って家々で作ったと言われている。しかし、現在では芋茎が2メートル以上になるように育てることはその手間も非常に大変であり、おおよそ決まった家から出されることが多いという。

明治44年の改暦に新暦の9月10日に祭の日が変化しているが、さらに昭和46年には学校の新学期との関係で現在の9月1日へと変化している。

そして、祭の主役となる山若となるべき15歳からの青年たちにとって、芋くらべ祭の準備に要する時間とエネルギーの意味もかつてのものとは変わってきているようである。年長者から厳しく祭の所作や、神饌品の作り方を指導されることは多くはなくなっているようである。ナラシと呼ばれ、毎夜遅くまで行われた稽古も、現在では山若どうして夜遅くまで集まっているようである。

中山の全体の人々の意識も伝統的なものを残すべきと考える人も多いが、祭に関しては簡略化すべきだという意見が多い。^(註6) これは中山に限ったことではないが、今日行われている多くの伝統的な祭はその費用負担などを含めて、存続が問われる事が多い。たとえば、芋くらべ祭の山若の衣装は袴をつけるわけであるが、七番尉になった年にはその準備をせねばならず、さらに毎年汗にまみれた袴を洗濯に出す費用もかかる。

中山では祭に女性が参加することはないといわれているが、実際この山若たちに衣装を準備し、

着付けをするのは彼らの母親である。山若の母親たちは祭までに御鯉を作り、四番尉の母親はハンギリの用意をし、祭の当日は仕事を休んで息子たちの着付けをする。つまり、彼女たちの積極的な協力がないと芋くらべ祭はうまく運営できないとも言えるのではないだろうか。

5. 結 語

中山の芋くらべ祭は、「天下の奇祭」などと言われ非常に特徴を持つものとして長い歴史を重ねてきた。少なくとも800年もの間、中山の地で続けられてきた祭である。それは野神祭であったものが、徐々に形を変え現在では熊野神社の祭として行われている。さらに、神仏合祀により中山の宮座がこれも熊野神社の宮座となり、芋くらべ祭もオトナとよばれる宮座の下で行われるようになった。それでも、この祭の主役は山若、山子と呼ばれる男児と男性である。その祭と女性とのかかわりを考えてきたが、多くの祭の場合と同じように女性たちは祭には参加しないが、いわゆる裏方として大きく祭にこれまでも貢献してきた。

女性は幼い子どもの時には、母親が御鯉を作るのをそばで見たり、少し成長した折には兄弟が山子あるいは山若として祭を司るのを見ている。そして、婚姻後には山若の母親として、オトナの妻として祭の重要な部分を支えることになる。さらにその後には、姑として祖母として祭の伝承を行うのである。

芋くらべ祭は、中山をあげての祭であるから女性たちも祭のある部分を担うのである。しかし、野神山の祭の祭場の中には女性は立ち入ることはできない。勿論、祭の中にその位置を占めることはない。それは神観念の問題からも、祭の中では女性は排除される存在なのである。その中で女性たち自身も、自らと祭との関係を受け入れてきた。しかし、近年意識の変化が起きる中で、「どうして、女の子が祭場に入ってはいけないの」という問いに納得させられる答えを出すことは難しい。

今日他の地域でも祭という儀礼が存続していくために、ある特定の人々あるいは家のみで行われていたものを村全体のものにするによって続くという場合も多い。この村全体のものにする、という中には女性も含まれると考えられるのではないだろうか。芋くらべ祭がかつてのように村全体の出来事という面が少なくなっている今、女性とどのようにかわらせていくかという点が祭の存続とつながるように思われる。

その一方で、さまざまな祭をめぐる状況の変化の中、この芋くらべ祭を存続させていくことは困難を伴う。伝統的な形での祭の意味を伝承していくことは、これまで以上にエネルギーを必要とするであろう。しかし、中山の山若たちは祭の日が近づくにつれて緊張感をみながら、思っていた以上に東西の競争意識が高まってくる。祭の当日衣装を身に付けていきながら、祭の所作を繰り返す姿はこれからも中山の芋くらべ祭が続いていくことを感じさせる。社会の変化と対応

した形で祭を維持することと伝統の維持とはある時には矛盾を生じさせるが、中山の芋くらべ祭も社会変化の波を受けながら続けられてきたのである。

<註>

- (1) 1992, 1998 年中山の芋くらべ祭の調査を行った。1998 年 9 月の調査の折には中山の郷土史研究家の岡本信男氏には大変お世話になり、またご指導を賜った。ここに感謝申し上げる。
- (2) 北原真智子 1956
- (3) 坪井洋文はこの芋くらべ祭に注目していた。
- (4) 『金剛定寺縁起』
「高倉院の御宇嘉応元巳丑年（1169）大山祇神の靈告に任せて恒例初穂山神乃祭をはじめ是を芋競と称せり」
- (5) 芋くらべ祭に出された芋の長さは、毎年祭終了後に芋の長さと奉納した者の名前とを東西それぞれの堂の板に書き残したという。
- (6) 岡本信男 1998

<参考文献>

- 北原真智子 1956 「双分制の一例—滋賀県中山の芋まつり—」東京女子大学『史論』第4集
- 岡本信男 1989 『近江中山の芋くらべ祭』芋くらべ祭保存会
- 1998 「伝承と農業—滋賀県日野町—」『むらを語る 第11輯』日本農業研究所
- 坪井洋文 1979 『イモと日本人』未来社
- 1982 『稲を選んだ日本人』未来社
- 1987 「芋くらべ祭—滋賀県蒲生郡日野町中山—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第15集
- 上野和男他 1991 「近江中山の芋くらべ祭」『国立歴史民俗博物館研究報告』第32集